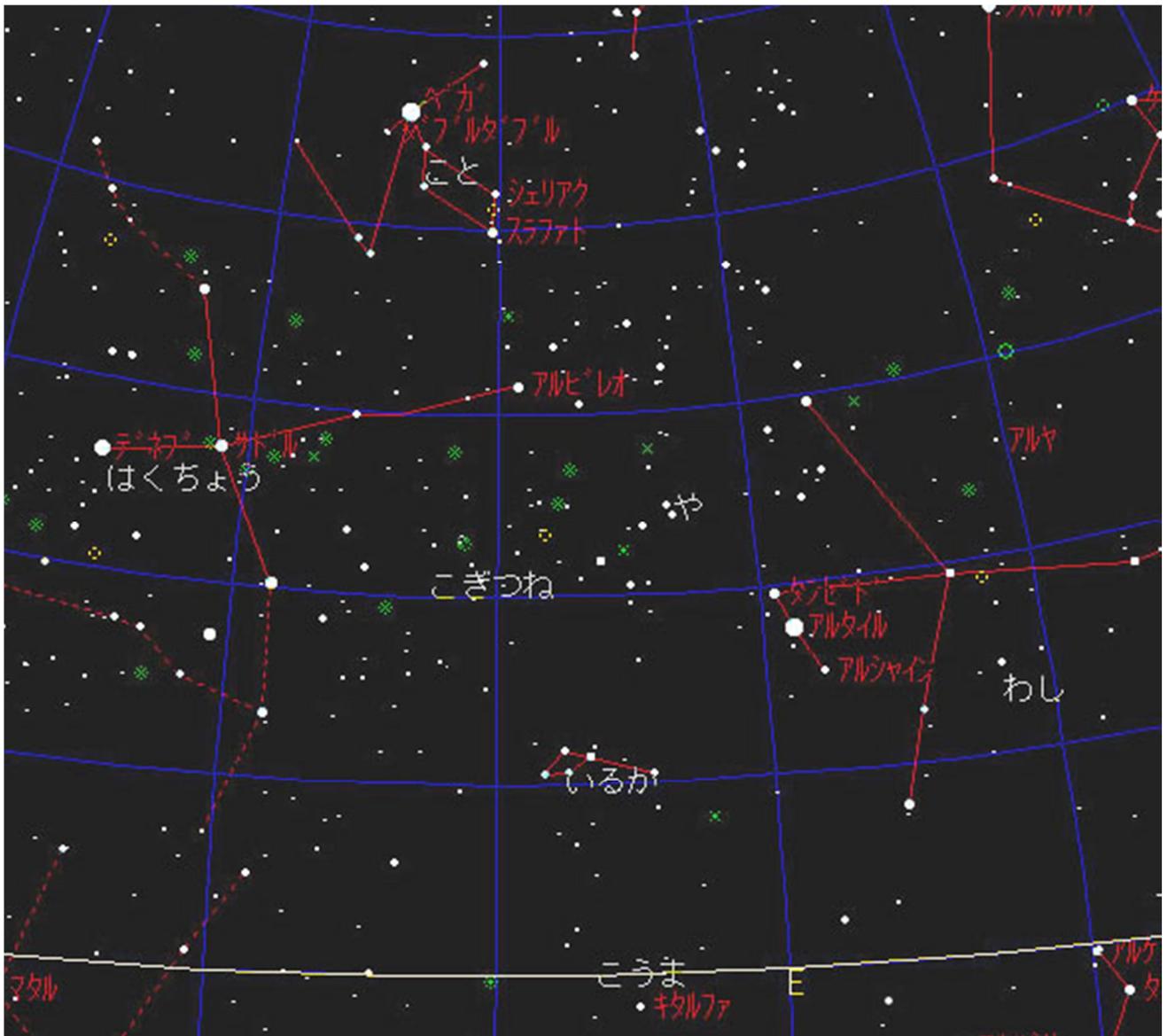


「16 光年の恋」

今日は七夕です。一年に一度、天の川をはさんで「織姫」と「彦星」が会うことができる日とされています。残念ながらこの時期は、日本列島で梅雨明けしているところはほとんどなく、今日の東京も曇り空です。しかし、雲の上では天の川が輝き、きっと二つの輝星は出会っているにちがいないと思います。ただ、どうやって出会っているのでしょうか？

織姫（こと座のベガ）と彦星（わし座のアルタイル）は地球からの視角度は約 30 度で、天球上から見かけではそれほど遠い星ではありません。しかし、実際の距離は 16 光年（約 150 兆 km）もあります。つまりこの二つの星は、物理的に会うことはおろか、コミュニケーションも難しいということです。



「7月7日20時の東京の東の星空」

織姫は約 45° 彦星は約 20° の高度に見えます。（“The sky”で計算、作図。）

たとえば織姫が彦星に向かってウィンク（明滅）をしたなら、それが届くのに 16 年、彦星がおかえしのウィンクをして、それが織姫に届くのに、また 16 年かかります。これはもう大変な遠距離恋愛ですね。ただ、別の見方をすれば、直径 10 万光年の銀河系の大きさから見れば、16 光年なんて手をつないでいるようなもの…とも言えます。

何とも夢のない話をしてしまいましたね・・・これでは申し訳ないので、数年前に偶然に七夕の日の撮った、織姫と彦星の写真を載せましょう。さて、どれが織姫でどれが彦星か、わかるでしょうか？



「七夕の日の織姫と彦星」 （北軽井沢にて。撮影；C.Tanaka）

天の川をはさんで二つの星、そして天の川の中に白鳥座が見えます。

北軽井沢は関東屈指の星が美しい土地で、庭先でも天の川が肉眼ではっきり見えます。

「織姫」と「彦星」は七夕の夜にしか見えない…というのは、広く信じられている誤解です。もしそれが本当なら、4年の理科の教科書は全社書き換えなければいけません。大丈夫です。周極性（季節や時刻に関係なく、一年中見えている恒星。）とまではいきませんが、織姫も彦星も初夏から秋まで、ずっと見えている星です。（北極圏では織姫は周極性です。）梅雨が明けたら、いや梅雨の晴れ間に星が見えたら、是非「16光年の恋」に思いを寄せてあげてください。

（お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋）